

みんぱく 私の逸品 帆走カヌー チェチエメ二号

標本番号 H0004975
地域 サタウル島
受入年 1975年

民博元外国人研究員

阮雲星

新しくなったオセアニア展示場には、引き続きチェチエメ二号が展示されている。このカヌーの特徴でもある大きな三角形の帆は、「大鳥」の羽を連想させ、今にも飛び立とうとしているかのようだ。帆のない中国のカヌーに親しんできた私にとって、何故か懐かしく思えるのは、以前日本に滞在していたときから数年ぶりの邂逅を果たしたから、というだけではない。

カヌーは中国語で「独木舟」「皮划子」と表記され、古代の丸木舟や、タケでできた小型舟、あるいはスキンボートを指す。一方、帆船というと宋の時代以降に活躍した海商舟などの大型の船が思い浮かぶので、帆とカヌーは私にとって意外な取り合わせだった。

ある日、みんぱくで開かれた夏休みものづくりワークショップ「帆つきアウトリガーカヌーを作って帆走させよう」に参加した。ここでは「沖繩へ航海するチェチエメ二号」が上映され、自身帆走カヌー航海の経験もある須藤館長が解説を加えた。なるほど「大鳥」に見えるのも不思議はない。チェチエメ二号は太平洋を駆ける遠洋カヌーだったのだ。

その後、チェチエメ二号に関する文献をとおして、伝統的航海技術や、関連する民話、さらにみんぱくに収められるまでの経緯をすることができた。

最近、中国においても文化遺産保護を目的とした博物館の建設がブームになっている。五〇年の歴史がある「福建省泉州海外交通史博物館」は、近年「中国の舟船世界」という展示場を新設し、約一六〇隻の実物・模型の舟船を常設展示している。昨年、国から認定されたばかりの浙江省「ナショナル海洋漁文化(象山)文化生態保護(実験)エリア」でも、現在所蔵の木造船模倣型とともに、消えつつある遠洋帆船作り技術や伝統的航海術の記録保存や、「舟船文化博物館」の建設などが計画されている。これらの計画をすすめるうえで、舟の収蔵と展示、異文化理解と研究、研究者と来館者の関係などの点で、みんぱくのチェチエメ二号がさまざまな示唆を与えるかもしれない。

チェチエメ二号が懐かしく思えたのは、おそらく私が、絶えず探検の夢に巡り会いたいと願っているからだ。「地球村」とも表現される現代は、異文化同士の「邂逅」がより頻繁に起きる知的探検の時代である。私にとってチェチエメ二号は、今にも知的探検に飛び立とうと羽ばたく美しい姿に見えてくるのだ。

